

約 100 名が二宮尊徳の 教えを学ぶ

去る 9 月 28 日(金)、宍粟防災センターにおいて、二宮尊徳の 7 代目子孫であり、関西学院大学講師の中桐万里子氏を迎え、「二宮尊徳の実践モデルを学ぶ」と題して、講演会を開催しました。100 名もの、老若男女さまざまな皆様にお越しいただきました。

中桐氏は尊徳について、「読書家、勤勉家のイメージが強いですが、実際のところは、机上の空論や単なる理想論を激しく嫌った現地現場主義者でありました。なぜなら、どんなきれいごとでも、実際の田畑が実らなくては意味も価値もないと考えていたからです。」と述べられていました。その考えは、尊徳の次の言葉に凝縮されているのではないのでしょうか。

「道徳なき経済は罪、しかし経済なき道徳は寝言」

参加された皆様は、尊徳の厳しく、それでいて、優しさのこもった言葉を、メモを取りつつ、真剣に聞き入られていました。

講演内容より抜粋

尊徳は、生涯で 600 余の村に実りを復活させ、農村を再建することに成功した。

しかし、尊徳一人の力で、600 もの村の田畑に実りを蘇らせることは困難であった。これを可能にするには、その村に住む農民たちが自ら積極的に「労働」へと向かうことが不可欠であった。

尊徳がいかに農民たちの力を引き出したのか。それは、農民一人ひとりを主役にするることである。その具体的手法は、尊徳が作った「五常講」という

制度にもっともよく表れている。

これは、無利子・無担保で少額融資を行い、10 か月で返済させるという、日本での信用組合の母体となった仕組みである。無利子・無担保と謳っているが、返済終了後も 2 カ月間同じ生活をして、2 回分多く返済してもらうことを前提とする制度であった。つまり、実質的には、利息相当額を徴収していたとも言える。もっとも、恩に報いるという意味で、返済終了後の 2 回分は農民が自ら進んで支払うこととしていた。これは、融資を受けた側に生じる、助けられたという劣等感をなくし、農民たちが助ける側に回ることで、自立を促す意味があった。農民からの返済金は、他の農民に融資され、尊徳はその仕組みから報酬を受け取ることはなかった。

いかに農民が自立できるか、このことに尊徳が知恵をしばっていたことが理解できるエピソードである。

ご案内

稲田会計事務所では、皆様の仕事に役に立つ情報を提供するため、定期的に講演会を開催しております。

今回は、平成 25 年 2 月 15 日(金)に、石川県ほくし羽咋市の公務員、高野誠鮮氏を講師としてお招きし、「ローマ法王にコメを食べさせた男」と題した講演を行っていただく予定です。

どなたでも参加できますので、ぜひ一度、ご参加ください。